

女人堤防

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

起 床してホテルの窓を開けると、鈴鹿山脈の方から強い風が吹いてくる。鈴鹿おろしというやつか。昨日はJR加佐登駅からJR亀山駅へと移動し、そこで一泊した。今日は電車で加佐登駅の一つ手前のJR井田川駅まで戻り、そこから歩いて女人堤防を目指す。

亀山駅に着いて電光掲示板へ目をやると、「台風二一号の影響：」と読めた。気にはなったが、せつちかちなので、すでに来ていた電車にさっさと乗って、出発を待つ。でも電車が長時間止まっているってことは、亀山はターミナル駅だったか？なんか変だな。しかし、定刻に電車が出発したから、問題はなさそう。井田川駅は一駅なのですぐに着いた。国道一号を昨日とは逆方向から加佐登の方へ向かって歩き、途中から安楽川(あんらくがわ)の堤防上を下流へと進む。

後ろを振り返った同行者が、鈴鹿山脈の方に不穏な雲があるという。どうやら、その雲から、雪がちらちらと冷たい風に運ばれてくるようだ。今日は寒くなるだろう。

ところで、安楽川はここから数百メートル下流で鈴鹿川へと合流する。その左岸側の汲川(くみかわ)原町には、女人堤防と呼ばれる堤防状の土盛りが残っているのだ。それは鈴鹿川の本堤防と直角に造られており、旧東海

道と国道一号によって分断されるが、長さは本堤防から北へ芥川までの四〇〇メートル程度。高さは一メートルから一・五メートルくらい。位置といい規模といい、これが堤防として役立ったのか疑問に思える。それはさておき、とりあえず女人堤防の伝説を見てみたい。

「むかし汲川原に暮らす村人は、鈴鹿川の氾濫に悩まされ続けていた。もつと堤防を高くしたかったが、そうすると対岸にある神戸藩(かんべはん)の城下に水が入るので許されなかった。そんな時、お菊という娘が、男たちが打ち首にならないように女だけで堤防を造ると提案した。女たちは夜になると堤防を造り続けたが、神戸藩主・本多忠升(ほんたのただのぶ)の知るところとなった。お菊たちは処刑場へ引き出されるが、家老・松野清邦(まきのきよくに)の諫めによって、間一髪で許しを得ることができた。そのうえ、藩主から健気だと褒められて金一封が贈られたという。」

汲川原の南西には安楽川と鈴鹿川の合流地点があるため、この辺りは最も氾濫しやすい場所と考えられる。しかし、女人堤防は鈴鹿川の本堤防と直角に造られているので、伝説のように鈴鹿川からの洪水を防ぐためとは考えにくい。では、いつ、何を目的に造られたのか。それについては、当社の広報誌「EAST TIMES」二〇一八年春号で私の考えを

述べており、当社のホームページから無料で読むことができるので、ご興味があればご覧いただきたい。さて、取材を済ませて堤防上をもと来た方へと戻るが、今度は風雪を真正面から受けることとなり、薄着が災いして、寒さにすっかりやられてしまった。昨日が暖かったから、鈴鹿山脈の本気をなめていた。東海道の関宿へと向かう予定だったが、いったん亀山のホテルにもどり、態勢を整えることにした。



女人堤防

【交通】①JR井田川駅から徒歩約1時間
②JR亀山駅から三重交通バスに乗り約30分、汲川原西で下車後、徒歩0分。ただしバスは2時間に1本くらい。

※三重の取材は2017年12月に行いました。